



第17号

編集・発行人 支部長 大橋 毅彦

現在進行形としての会報

大橋 毅彦

現在二百八十名を数える関西支部の会員が、一堂に会するのは年二回の大会の時。昨年の春は百二十名、秋も九十名が参集し、研鑽と親睦の時を過ごした。

だが、希望していても、詮方ない事情で、出席の叶わぬ会員もあるう。私たちが自身の学問や研究を進ませようとする時、よほどの傑物やへそ曲がりでもないかぎり、孤絶主義は得策ではない。自らを開いた場所に誘ってくれる人やモノとの対話が肝要だ。そういう出会いの場を保証する手立ての一つとして、従前の編集方針を一部変えた、支部会報十七号をお届けする。

〈天馬の脚〉のごとき題字を冠した今回の小冊子は、支部の活動が現在形に進んでいることを示した。次回の大会案内を掲げて期待の地平を広げていただくのはむろんのこと、前回の大会を振り返る頁でも、フロアからの率直な反応を告げる「印象記」に加えて、「発表を終えて」という欄を新設、登壇者サイドからの反応も伝えることを意図した。会場での質疑応答が、紙上にあつて継続されるわけである。

もう一つの特徴は、支部会員の学術的刊行物を取り上げた書評欄を設けた点である。これまでの会員「業績一覧」とは違ふかたちで支部の元気なところを伝えるとともに、限られたスペースながら書評子にも健筆を揮ってもらい、その声を響かせてもらった。

さて、ならば次なる特色はと言えば、——それをもたらしてくれるのはあなたにちがいない。

支部大会案内

二〇一三年度

春季大会

於・関西学院大学

六月一日(土)

午後一時より

〔プログラム〕

開会の辞

関西学院大学文学部長 松見 淳子  
シンポジウム

「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」  
趣旨説明 司会 木田 隆文  
山本 欣司

登場人物の類型を通して

作者は何を語るか 日比 嘉高  
〈書く読者〉が見た夏目漱石

教室の中の〈作家／作者〉 木村 功  
北川 扶生子

〈作家／作者〉は

なぜ神話化されるのか 中村 三春

閉会の辞

支部長 大橋 毅彦

総会

連続企画(第一回)

シンポジウム

「文学研究における

〈作家／作者〉とは何か」

〔趣旨〕

かつて、〈作家／作者〉は、作品の唯一のよりどころであり、その作品は思想それ自体を表したものとみられてきた。だが、「作者の死」(R・バルト)の宣言以降、テキストから構成される概念へと位置を移したことで、以前の役割とは異なつた相貌を見せるに至つた。

テキスト論の出現から一定の期間を経た後、文化研究、ポストコロニアル批評、ジェンダー研究など、様々な方法論が試されてきた。その都度、新た

に立ち上がる〈作家／作者〉の存在があつたといつてよい。たとえば近年、「私小説」研究におけるパラダイムチェンジがさかんに行われていることも、そうした現象の一つと見ることもできよう。肉筆原稿が呼び覚ます〈作家／作者〉も、テキスト生成の現場を考察する上では無視できない対象である。

一方、文学が親しまれる場に目を向けても、たとえば、教室のなかで文学に触れるとき、あるいは、映画やドラマ、マンガなどのメディアで出会う〈作家／作者〉像、さらには、エンタテイメントやサブカルチャーにおいてキャラクター化されるイメージなど、検討すべき射程は広く、その対象は多様である。

〈作家／作者〉を取り巻く状況が渾沌とする現代において、その存在が投げかける問いは、より複雑な様相を呈している。今こそ、文学場における多元的な〈作家／作者〉へのアプローチを目指すべきではないだろうか。

日本近代文学会関西支部は、四回の連続企画をもって〈作家／作者〉を再検討する。伝記・年譜研究などに代表される実証的な作家研究の手法から近年の文学理論をふまえた研究まで、それぞれの批評的角度と到達点を捉え直し、研究の新たな地平をきりひらくことを企図する。学会内外からの積極的な参加によって、〈作家／作者〉の現在の位置を測定してみたい。

二〇一三年度春季大会の特集企画は、本連続企画の総論と問題提起を行う基調シンポジウムと位置づけ、従来の〈作家／作者〉を中心とした研究における問題点の抽出、方法的な可能性の模索、〈作家／作者〉とその生きる「場」（ローカリティ、文学場、メディア：）との関わりなどを討議する――。

#### 〔発表要旨〕

登場人物の類型を通して

作者は何を語るか

―― 小説を起点に――

日比 嘉高

「作家／作者」を論じるといっても茫漠としており、何か焦点を作らなければ拡散してしまいそうだ。今回の私の発表では、小説における主人公を補助線としてみよう。

主人公の問題というのは、近代文学研究の世界では意外に考えられてこなかったように思う。「余計者」とか「トリックスター」などのように、個別にあるいは理論的類型として捉えられたものはある。また、この問題に関心を払った先達としては伊藤整がおり、近年の成果では石原千秋『近代という教養』がある。目を転じれば現代のサブカルチャー批評の文脈では、大塚英志や東浩紀らの考察が牽引したキャラクター論（データベース消費）が注目

を集め、近現代文学の研究者にも参照されてきた。だが問題の大きさに比して、成果は少ないと言わざるをえない。なぜ作家の問題を考えるときに主人公から論じるのか。文学テクストとは、作家がその認知的枠組みに拠って捉えた世界を、物語の諸装置を操作しながら記述し構成し、読者へと伝達する言語テクストである――と考えてみよう。作家はこのとき、主人公を自身と読者の間に置き、その主人公の知覚や思考、動作を描出することを通して、自らが認知した世界像を読者に伝えようとする。したがって、主人公はある種の認知的な「依り代」もしくは「代行者」となる。

この代行者たる主人公は、原理的にはいかような人物としても書かれうるが、文学史的に眺めれば、いくらかの類型が浮かび上がる。では、類型をもって代行者を行うとき何が起こるか。類型はいかなる役割を果たし、何を担っているのか。小説を例に考えてみたい。

〈書く読者〉が見た夏目漱石

―― 文体・ジャンルの

社会的機能と〈作者〉――

北川 扶生子

作品は、これまでに書かれた数多くの作品のなかに産み落とされ、古典となった過去の作品との関係において、理解され評価される。作者を、読者の読む行為ごとに立ち上がる像と見るならば、作者の名が様々なかたちで流通するメディア空間におけるこのような古典化への闘争のなかで、読者が立ち上げる作者像に、文体やジャンルという要素はいかに関わるのだろうか。

文学作品の文体とジャンルは、作品の内部と外部という、文学研究における二項対立を乗り越える契機のひとつである。ある作品で選択された文体とジャンルは、先行作品への何らかの応答であるとともに、特定の社会階層や読者層および世界観とつながって

り、しばしば読者の鑑賞法をも方向付けるからである。このようなつながりは、江戸期の学芸諸ジャンルが再編成され、言文一致体による小説が浸透するまでの時期にはとりわけ、幅広い読者に共有されていたが、その社会的な機能が十分に解明されてきたとは言い難い。

今回はこの問題を、一九世紀末から二〇世紀初めの世紀転換期における〈書く読者〉たちが、多様な文体を駆使する夏目漱石の初期作品をどのように読んだかという例から考えたい。この時期、文学作品の読者はしばしば、書くことを楽しみとし、作文の腕を互いに競い合った。作文は、旧来の文体やジャンルへの感性を、〈教養〉として読者が保持する場ともなった。文学とメディアと教育にまたがる作文という領域を経由することで、漱石の像がどのように変化したかを観察することから、文体やジャンルの社会的機能と〈作者〉の関わりを検討したい。

教室の中の〈作家／作者〉

―― Takumi's Adventures

in Wonderland――

木村 功

教育（国語教育）の世界における文学とその作品の位置づけは、あくまで教材としてである。小学校・中学校の義務教育段階では、専ら言語教育のための、高等学校では言語文化の教育のための教材である。また、国語教育が必ずしも文学教育と同義でないことは、了解されていると思う。今回の発表では、小学校・中学校段階での国語教育における文学、〈作家／作者〉をめぐる問題について報告したい。

言語能力育成段階での文学作品は、「読む・書く・聞く・話す」能力の育成と言語事項をインプットしていくための教材であり、作品が内蔵しているイデオロギーについて顧みられることはない。例えば「ごんぎつね」の悲劇

的なラストシーンは、作家新美南吉が意図していたであろうディスコミュニケーションを表現していたものではなく、ごんが自らの死と引き換えに、兵十への思いを伝えた感動的なコミュニケーションの物語として指導される。

このように発達段階に応じた作品理解が優先される指導の背後には、共感やコミュニケーションの成立を前提とする教育の世界独自のイデオロギーが存在している。作品一つ一つの独自の世界観の理解を通じて、世界の多様性・多義性を学ぶことよりも、共感・友愛・協働など、社会へ同化を促すための統合的価値を優先する教育界特有の価値観が、教員を通じて指導されるのである。小学校・中学校における文学教材をめぐる、実際の〈作家／作者〉の存在、そして作品の言説と教育の言説がせめぎあう様相を明らかにしてみたい。

〈作家／作者〉は

なぜ神話化されるのか

— 文芸解釈の多様性と相対性 —

中村 三春

《だれが話そうとかまわないではないか》(ベケット)という理念を基軸として「機能としての作者」を分析したフーコーの「作者とは何か?」(一九六九)は、一九九〇年に翻訳が出版されたが(清水徹・豊崎光一訳、哲学書房)、日本文学研究においてそれに基づく展開は芳しくないようである。

フーコーは、「機能としての作者は言説の世界を取りかこみ、限定し、分節する法的制度的なシステムに結びつく」とする。この「法的制度的なシステム」の一端を美証的に論じた鈴木登美『語られた自己 日本近代の私小説言説』(二〇〇〇、岩波書店)が話題となった。理論的には、それは一九八三年の桂秀美「『私小説』をこえて」

(『メタクリティーク』、国文社)によって先取されている。「私」など所詮は虚構なのだ。しかし、これらの寄与はどれほど一般化しているだろうか。近代文学研究における作家／作者をめぐる理解のパラダイムは、一世紀前からこの方、ほとんど変わらないのではないか。

この発表の要点は、〈作家神話〉と〈作者神話〉との交錯点において、文学研究の基盤をなす解釈(読解)の多様性と相対性を突き詰めることにある。この〈神話〉とは、(作家個人と作者概念に関する)崇拜的・妄信的な固定観念というほどの意味である。いわゆる文化研究のように社会的に跡づけるのではなく、ネルソン・グッドマンの「解釈と同一性—作品は世界よりも長生きできるか」(一九八七、菅野盾樹訳、『記号主義』二〇〇一、みすず書房)の言語哲学的な観点から見直してみる。志賀、太宰、賢治の外、幾人かの代表的近代作家に触れる。

## 二〇二二年度 秋季大会

十一月三日(土) 於・立命館大学

### 大会発表を終えて

『京都近代文学事典』の

編集作業から

田中 励儀

近年、個人作家全集の刊行が激減し、古書店での値崩れがはなはだしいのに対し、府県別文学全集や府県別近代文学事典は、着実に刊行されているように見える。これは、たとえば『昭和文学研究』第64集(平24・3)が「フィクションとしてのローカリティ」という特集を組んだように、〈地方の時代〉を反映した現象と捉えることもできよう。

今回の小特集「地域別文学事典と近代文学研究」で基調報告をしていたいた宗像和重氏が、「〈地〉と〈図〉の逆転」を指摘されていたことは傾聴に値する。東京を中央と考える固定観念を相対化する意味は大きい。一方で、事典項目への採否によって「作家の序列化」が引き起こされるというのもまた事実である。

私が編集に携わった『京都近代文学事典』の場合、観光都市京都を訪れたことのない作家の方が稀であろうし、さらに府下全域をカバーするものではないら、作家の取捨選択作業は困難を伴った。そのうえで、一般的な『文学事典』での必要事項に加え、①京都出身作家の出生地の表記、②京都の高校・大学等の学歴、③京都での居住歴、

④京都訪問の時期と目的、⑤京都を舞台とした作品の紹介、を前面に押し出してくださるよう、各項目執筆担当者にお願した。

先行の『文学事典』の引き写しは何としても避けねばならず、作家と京都との関わりを具体的に調査するのは、ずいぶん手間のかかる作業だった筈である。詳細な調査に比べて記述できる字数は限られており、しかも誤記が目立れば事典の信憑性が疑われる。事典項目の執筆は、労多くして功少ない作業であることは免れない。それでも例えば、秦恒平や吉井勇などが一般の『文学事典』よりよほど大きく採り上げられたこと、京都出身作家を幅広く立項したことなどは、府県別近代文学事典の功績と認められてもよいだろう。

一昨年の『兵庫近代文学事典』につづいて、今年、『京都近代文学事典』が刊行されれば、関西二府四県の『近代文学事典』が出揃う。小特集で、私はあえて編集集中の『田中英光事典』を取

り上げ、個人作家事典との比較を行ったが、コンセプトの異なるさまざまな事典が必要に応じて使われ、文学研究の新しい視角が生まれる契機となることを期待したい。自分が編集に関わった責任を棚上げて言うのだが、事典には何よりも信頼に耐えうる内容・データが必要であることは間違いない。

発表を終えて

呂 慧君

日本近代文学会関西支部の二〇一二年秋季大会で発表するチャンスを得たことに、感謝の意を表したい。そこでは「内山完造の作品世界―人情味」の溢れる伝統的な都市空間としての上海」と題して発表し、当日貴重な御意見を下さった皆様に御礼を申し上げる。まず、村田裕和氏から、アナキストのクロボトキンが書いた『相互扶助論』に関して指摘を賜った。発表者は

内山が描いた中国人社会における、一種の社会政策のような「相互扶助」の精神を取り上げたので、やはり、新しい社会を作るためには、相互扶助の精神が必要だというクロボトキンが指している意味と比べ、内山の作品にある助け合いの精神はどういうものかについての検討が必要だと考える。それから、木田隆文氏から戦時中という特殊な時代の中での内山の本心についてご質問をいただいた。内山の作品には戦時の日本の国策に応じた言論がないわけではないが、例えば当時上海で発行された国策新聞『大陸新報』への寄稿を見ると、彼は圧力が加えられても、そういった発言の頻度が他の同時代の文人と比べて非常に低いので、彼の文章には信憑性があるといえるのではないだろうか。最後は司会者（高木彬氏）からの質問である。内山の作品は主に随筆なので、他の小説と同じレベルで考察することが可能であろうかという質問に対して、私も内山のテキストに

ある現実の部分と他の小説で取り上げた非現実的な部分を読み比べる時に、やはりその差異を無視することができないと考える。内山と比較する作品は、なるべくエッセイのジャンルから選びたい。

今回の発表では、内山と魯迅が中国人社会を描く時の温度差を少し取り上げた。そのほか、現在まで読み終えた中国人作家の作品には、庶民を、圧迫された哀れなもの、あるいは頹廢的なイメージ、さらに安定した裕福なイメージとして描いたものが多い。今後は、内山と同時代に中国に根付いた作家の上海文化を取り上げたエッセイを網羅することによって、伝統的な友愛の精神を描いた内山の視点がいかに独自のものであるかを検証していきたい。また、もう一つの課題としては、内山の随筆に斬新な視点からアプローチし、「人情味」以外の新たな特質を論じることがあげられる。

## 大会印象記

### 研究発表

田口 律男

ふたりの自由発表を拝聴しました。

ひとりには呂慧君さんの「内山完造の作品世界―人情味」の溢れる伝統的な都市空間としての上海」。発表内容は、副題に集約されるシンプルなものでしたが、呂さんが注目したポイントのひとつに、内山の「幫の精神に基づく相互扶助」(『上海夜話』へのこだわりがありました。これは家賃の支払いや、「告化子」(乞食)の待遇をめぐる浮上する庶民生活の実相でした。それを掬いあげたのは確かに内山ならでの慧眼といっていでしょう。ただ私見によれば、こうしたアプローチは、

すでに村松梢風『支那漫談』(一九二八)にも萌芽しており、内山完造を単独で評価するのは、すこし性急かなという気もしました。また、フロアから質問があったように、クロボトキン経由の「相互扶助」との差異や、当時の国策的言説との距離といった同時代文脈との関係が重要課題になってくると思われまます。これは相当骨の折れる仕事ですが、その分やりがいはあるでしょうから、粘りよく調査を進めて欲しいと思います。幸い、関西には上海研究のネットワークが豊富にありますので、呂さんが迷子になる気遣いはありません。

もうひとりには森本智子さんの「少年たちの〈郊外〉―宮沢賢治と森見登美彦の試みを中心に」。時代とともに変容する〈郊外〉と、そこから喚起される文学的想像力との照応関係を、「銀河

鉄道の夜」と「ペンギン・ハイウェイ」を主軸に考察するという、たいへんブリリアントな問題設定でした。じっさいの発表内容は、もっと盛り沢山で、重松清、橋本紡、山内マリコ、吉田修一、谷川流などの諸テキストを横断しつつ、〈郊外〉の歴史の変遷にも目配りがなされました。だからなのか、肝心のメインディッシュをいただくころには、だいぶお腹がいっぱいで、「銀河鉄道の夜」と「ペンギン・ハイウェイ」との七〇年を隔てたシンクロニシティの醍醐味を、じっくり堪能する仕儀とはなりませんでした。食材やレシピは似ていても、仕上りの品質やテイストは大きく異なるはずで、その意味では、フロアから問いかけられた両者の「差異」という視点も重要なのでしょう。でも、森本さんの追いかけるテーマは面白いし、さぞや森本さんの展開

するクラスは活気があるだろうと羨ましくも思いました。

簡単ですが以上です。こうした印象記にはイヤな思い出があるので、恐る恐る、でも正直に書かせてもらいました。

## 小特集

原 卓史

二〇一二年度秋季大会は、一月三日、立命館大学衣笠キャンパスで開催された。特集は、「小特集『兵庫近代文学事典』『京都近代文学事典』刊行記念コロキアム―「地域別文学事典と近代文学研究」で、地域別文学事典の刊行を記念して企画されたものである。

基調報告の宗像和重氏「地域別文学事典と近代文学研究」は、『日本近代文

学大事典』（全六巻）以降に一九冊の地域別文学事典が刊行されたことから話を始められた。地域と文学への関心が高まり、古代以降の文学を含むこと、文学と風土の結びつき、地元の愛好者による成果、地元出版社からの刊行を特徴だと指摘した。『兵庫近代文学事典』と『京都近代文学事典』の両方に立項されている村上春樹を例に、複数の記述が相対化しあう関係にあるところに意義があるとする。そして、地方（じかた）学としての近代文学の研究の必要性を提唱した。確かに大学卒業までの村上春樹の記述の差は大きく、その指摘は大変興味深い。しかし、どの事典にも立項されない作家が数多くおり、複数の事典に立項されること自体が正典化に繋がる可能性があり、今後は立項項目自体の相対化が必要だと感じた。

デイスカッサントの田中勳儀氏「『京都近代文学事典』の特色と問題―個人作家事典」との比較から」は、京都の出身者、学校出身者、在住経験者、旅行経験者、京都を舞台にした小説の執筆者を中心に項目を選定したという。

近代以降も京都出身の作家が多いのが確認できたこと、東京中心の文学史を相対化できるようになったことなどが指摘された。一方、個人作家事典として『田中英光事典』についても言及し、作品事典、著作目録、書誌、参考文献目録等が紹介された。個人作家事典の成果が地域別事典に活かされ、地域別事典で初めて立項された作家が個人作家事典作成のきっかけとなるような相乗効果を期待したい。どちらの事典も二〇一三年春の刊行予定であるという。事典を手に取りることができない状態での議論だったので、その点が残念

に思われた。一日も早い刊行が望まれる。事典編纂をめぐる興味深い話で、とても充実した小特集であった。

## 小特集

戸塚 麻子

後半は、小特集『兵庫近代文学事典』『京都近代文学事典』刊行記念コロキアムが、「地域別文学事典と近代文学研究」というテーマで行われた。

宗像和重氏による基調報告のテーマは「地方（じかた）学としての近代文学研究、その実践としての地域文学事典」である。「地方」とは、新渡戸稲造の用語で、土地のみを意味するのではなく、「土地に直接関係のある農業なり制度なり其他百般のことを含」（新渡戸稲造「地方の研究」『斯民』第二編第二

デイスカッサントの西尾宣明氏「項目・ランク・地域性など―『兵庫近代文学事典』の編集等について」は、『大阪近代文学事典』が純文学を、『滋賀近代文学事典』が地元出身者優先を考え項目を選定したとする。それに対して『兵庫近代文学事典』の編集の特長として、文学のジャンルの多様性、神戸モダニズムの多様な方向からの説明、兵庫県内の文学館・美術館の紹介を通じた地域振興などを挙げた。質疑では伝記研究についての困難さ等について議論が交わされた。項目の執筆は執筆者に任じたとの回答があった。確かに『兵庫近代文学事典』を通読してみると、項目の記述の仕方にバラつきが見られる。しかし、たとえば名簿図書館など、図書館でも調べられることがある。可能な限り調べつくした上での記述かどうか重要なものではなからうか。

号、明治四〇年五月）む。宗像氏はこの「地方」をキーワードにし、従来の研究を相対化する試みとして、地域別文学研究を評価された。

一九八〇年代後半から都道府県単位の文学事典が相次いで刊行されるようになった。こうした地域別文学事典の刊行は、一九七〇年代、「地方の時代」がうたわれ、新しい生活や価値観、新しい社会システムが求められたという時代の趨勢と関わりがあることを指摘された。また、そうした動きと関連し、各地に文学館が設立され、地域の文学を掘り起こす上で大きな役割を果たしたとも述べられた。また、ハルオ・シラネ氏が、アメリカ・ヨーロッパにおける文学の動向として、①物質文化への関心、②民衆・大衆文化への関心、③非中央性、④ポストコロニアリズム研究への関心、の四つを指摘したが、

日本における地域別文学事典の編集・刊行も、こうした動向に見合う形でなされた。権威を単一化せず、複数化することによって、序列化を相対化する試みであるとして、今回の刊行を高く評価された。同時に、単なる行政単位にすぎない「県」ごとに区切ることに対し、議論する余地はあるとの指摘もなされた。

続いて『兵庫近代文学事典』編集委員長、西尾宣明氏による報告「項目・ランク・地域性など―『兵庫近代文学事典』の編纂等について」であった。まず、『大阪近代文学事典』『滋賀近代文学事典』『兵庫近代文学事典』の三つで事典の性質が異なるとして、その内容について具体的に説明された。それぞれの地域にマッチした項目の立て方が工夫されていることがわかった。本題の『兵庫近代文学事典』では、兵庫・

神戸は類型化されたイメージを付与されがちであるが、出来る限り多様化するよう編集を心がけ、討論を重ねたと述べられた。映像や漫画といったサブカルチャーについても極力集めようとしたが、それには、編集委員がいわゆる「国文学科」の人間ばかりではなかったためもあり、大学において日本文学から日本文化へと変化が進んでいるという背景も絡んでいるというお話は、大変興味深かった。また、地域を代表する文学事典の難しさについても指摘された。政治・行政主導の「地域再生」や「地域貢献」に、意図せずしてつながってしまうおそれがあることも考えておかなければならないという指摘は、考えさせられるものがあった。

最後に『京都近代文学事典』編集委員長の中野儀氏の報告であった。『京都近代文学事典』の特色と問題―

## 書評

増田裕美子・佐伯順子共編

### 『日本文学の「女性性」』

山本 欣司

二松学舎大学東アジア学術総合研究所の共同研究プロジェクトにおける研究成果として出版された、支部会員共編による共著である。六回の公開ワークショップで延べ十三人の研究者が発表を行ったということだが、充実した論考が多い。目次は以下の通りである。

◇第一部 「男性文学」の女性性・三島由紀夫『朱雀家の滅亡』・ジェンダーの観点から―戦前日本における家庭の抑圧の光景―(市川裕見子) / 少女とロココ―「女生徒」における(少女)表象―(平石典子) / 『行人』のお直をめぐって(増田裕美子) ◇第二部 女性による表現世界…一葉・ウルフ・デュラス―近代日本女性文学の国

際性―(佐伯順子) / 〈母の涙〉の二重性―敗戦後文学としての『二十四の瞳』―(菅聡子) / 松浦理英子論―魅惑する鈍感さ―(大貫徹) ◇第三部 新たな展開…一九八〇年代の「少女小説」と女性文化の伝統―氷室冴子を中心に―(杉山直子) / 少年同士の絆―あさのあつこ「バッテリー」をめぐる欲望と暴力―(藤木直実) / ライトノベルの方へ(目野由希)

『書く女』としての樋口一葉のジェンダーのありようを、ヴァージニア・ウルフやマルグリット・デュラスと比較しながら論じた佐伯論文も示唆的であったが、松浦理英子「ナチュラル・ウーマン」における容子の「鈍感さ」と

〈個人作家事典〉との比較から」である。編纂に際する項目の選定について話された。特に興味深かったのは、この編集作業により、いままで京都出身の近代以降の作家は少ないとされてきたが、実は多いことがわかったことである。一般の文学事典では大きく取り上げられない作家を取り上げることができたとも述べられた。今まで制度化されていた東京中心の見方に対し、相対化できたのではないかと述べられた。討論では、コラムの内容についてや、データベース化の是非等が議題に上がった。最後の方で宗像氏が、「非中央化」と言ったが、地方と東京が全く対立して戦っているわけではなく、中央がどのように地方に織り込まれたりしたのか、という疑問が提出され、非常に印象的であった。

その喪失のさまを鮮やかに浮かび上がらせた大貫論文には、闊達な文体も含めて大いに魅了された。また、児童のみならず幅広い読者に支持される「バッテリー」が含み持つ暴力性―女性の疎外とその再生産―を指摘し、さらに「少年嗜好」発言を繰り返す作者・あさのあつこが「やおい」「BL(ボーイズラブ)」として読まれる「のりしろ」を意図的に用意しているのではないかと批判する藤木論文は、刺激的かつ説得的である。さらに、氷室冴子を中心に、一九八〇年代の「少女小説ブーム」を丁寧にあとづけた杉山論文も面白かった。ライトノベル研究の方法論に鋭く切り込んだ目野論文も必見である。全体として、(今日的な)メディアミックス状況を前提とする論考が多く、その点でも学ぶべき点が多い良書である。

(二〇二一年二月二五日 思文閣出版  
二二九頁 一三〇〇円十税)

山口 直孝 著

## 『「私」を語る小説の誕生』

荒井 真理亜

「私」を語る小説」とは何か。著者は「作家の体験に基づいたできごとを、主人公が語り手となって伝える小説」と定義する。「私」を語る小説は、「自己表象テクスト」（日比嘉高、二〇〇二）すなわち「作家が自分自身を登場人物として造型した小説」に包摂される下位区分であり、一人称形式であることが要件だという。

本書は、一九一〇年代前半に「私」を語る小説」が登場してくる経緯とその特徴を考察したものであり、「自己表象テクスト」に関するこれまでの研究が素材論的アプローチによるものであったのに対し、「私」を語る小説」の成立過程を表現形式の面から解き明かしている点が特色である。

一九一〇年前後の文学状況を、著者は次のように捉える。日露戦争後、自己への関心が深まっていく中で「自己表象テクスト」が登場する。当初は自己を対象化する困難から、友人を中心に描いたり、三人称形式を用いたりしたものであったが、そのうち「私」を語る小説」の実験が始まり、やがて「自己生成小説」が出現した。わずか数年の間に起こったというこの複雑な変化を、著者は当時発表された膨大な作品を整理することで明らかにした。広範な調査と緻密な分析に基づき、その過程を検証しているのが、説得力がある。さらに本書は、近松秋江と志賀直哉を取り上げ、作家レベルでも「私」を語る小説」の展開を追う。近松秋江と

志賀直哉を同じ俎上に載せたのは「私」をめぐる関心のありようと創作での苦心とにおいて、彼らは一つ典型たりえており、かつ同時代の水準を越えた達成を見せている」からだという。両作家の初期作品の分析を通じて、書簡体小説や日記体小説の試みが、複雑な内面の描出を可能にし、「私」を語る小説」の誕生に寄与したと考察する。

同時代における書簡体小説や日記体小説の流行も視野に入れ、書簡と日記という近接ジャンルとの交渉によって、小説の表現形式が拡張されていったとする著者の見解は興味深い。

内容・表現ともに多種多様な日本の近代文学を考えた時、「私」を語る小説」という分類の難しさも感じた。「私」を語る小説」のその後の展開も含めて、著者のさらなる解明を待ちたい。

（二〇一一年三月二五日 翰林書房  
二七九頁 二八〇〇円＋税）

笹尾 佳代 著

## 『結ばれる一葉 メディアと作家イメージ』

水野 亜紀子

本書は樋口一葉を取り上げ、メディアを通じて表象される作家像とその作品について考察するものである。作家像が「周辺の様々な事象と結びつけられながら編みあげられていく諸相」を論じ、さらに、一葉作品が「メディアとの結びつきのなかで、新たなテクストとして誕生」する様を論じる。本書のタイトルはこのことを表している。

第一部では表象としての「一葉」が、同時代の言説を検討することを通して丹念に論じられる。「一葉」は時代の文脈に沿った意味を付加され続けることよって評価を得てきたのだとし、例えば第三章では、東宝映画『樋口一葉』を取り上げ、そこに描かれる「一葉像」

は表現者たちのプロレタリアのイデオロギーが託されたメディアとなっていくことを明らかにする。第四章では一九四〇年代に目を向け、紀元二千六百年奉祝美術展覧会に出品された鏝木清方が描く『一葉』について、小出節子の小説とその加筆、改稿を参照することで、戦時下における一葉評価の変容について考察する。いずれの論においても、結論を急がず、慎重に検討を重ねる展開に説得力を感じる。

第二部では、メディアの機能を重視して一葉テクストを検討する。第七章から第九章では様々なメディアにおける一葉享受の事例を、ローマン・ヤコブソンのいう「創造的転換」の見地か

ら捉えることによって、それらが原作へと創造的に意味を付与していく様をみていく。第九章は、今日の児童図書としての「たけくらべ」の位置を念頭に置きながら、第二次世界大戦後という時空間と「たけくらべ」との交差の諸相に目を向けるものである。学校劇などを視野に入れ、「たけくらべ」が民主化のすすむ「現在」を多分に意識させるものに「翻訳」されたことを指摘し、その享受が「過去への批判のまなざしを失っていく（戦後）」を映し出すことを明らかにする。ここに筆者の問題意識が強く打ち出されていると感じた。ちなみに、巻末には充実した「樋口一葉」受容史に関する文献目録が付されている。一葉文学を多角的に捉える本書は、今後の研究に大きく寄与するものである。

（二〇一二年二月二八日 双文社出版  
二八二頁 三四〇〇円＋税）

書評

友田 義行 著

『戦後前衛映画と文学 安部公房×勅使河原宏』

坂 堅太

本書の中心となっているのは、安部公房が原作・脚本を担当し、勅使河原宏が演出した『おとし穴』『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』という四つの長編劇映画と、その原作テキストとの往還的な作品分析である。安部が映画という表現形式に深い関心を寄せていたことは広く知られている。しかし、

「文学研究の分野においては、『安部と映画』という問題系が十分に論じられることはなかった。勅使河原という映像作家との『協働』という視点から安部の文学を捉え返した本書は、そうした安部研究の現状に一石を投じている。中でも、『燃えつきた地図』における鏡像と反転のイメージを『言語のモ

ンタージュ』という映画的手法の応用として位置付け、勅使河原とのコラボレーションの産物として読み解く第七章は、安部の創作理論と映画との深い結びつきを鮮やかに提示しており、文学・映画の往還的読解という本書の強みが存分に発揮されている。

また、映画・文学双方の協働研究という点でも、本書は高度な達成を示している。特に「言語と映像」論争を取り上げ、安部のドキュメンタリー論・モンタージュ論を同時代の映像作家たちの理論と比較分析した第二章は重要である。文学者による映画論の意義を取り上げたこの章では、「映画」という研究対象が「映画研究」に限られない

書評

岡村 知子 著

『太宰治の表現と思想』

宮崎 三世

本書は、太宰治と丸山眞男との思想的な共通点を探ることから開始されているように、思想史や哲学の視座を導入することで作品の読みを深め、作家の問題意識を明らかにしようとしたものである。とりわけ、後に『物語の哲学』に収められる野家啓一氏の一連の論考は、論に基本的な枠組を与えているように思われる。

随筆「知らない人」では、K教授への追悼文が、病中の「私」を「寢床に起き直りたい気持」にさせる。追悼文は、「K教授」という「美しい人」をめぐる四つの物語りが喚起する希望の「念」と、K教授を奪った「戦争こそ、これらの物語を産んだ厳しい現実には

かならないのだという、抜きさしならぬ状況に対するいわば憤怒の念」を「私」に喚起し、この随筆を書かせることとなる。「語られた物語内容を通して、背後に広がる、語りえぬものに満たされた現実に向かって「存在論的コミットメント」を開始する力（想像力と構想力）を、読者のうちに呼び覚ますこと」。本書では、これが「文学の果たす機能」であると規定されている。

このような論点は、語るることによって「言語共同体によって形作られてきた間主観的『語り』の地平」へコミットメントするという問題にも関わってくる。「女生徒」「皮膚と心」の「女語り」は、「作品の外部にひしめく男女の

ことが示されており、「映画研究と文学研究の垣根を越えた取り組み」という学際的な研究への道を開く確かな一歩となっている。

なお、安部×勅使河原の最後の協働作品となった「一日二四〇時間」についての論考は、作品の上映が叶わなかったために本書には収められていない。これは無いものねだりに過ぎないことは重々承知だが、多面スクリーンによる「面的モンタージュ」など、あくまで実験的であり続けた両者の協働の終着点を、著者はどのように位置づけるのが知りたかった。しかし、著者は既に昨年の関西支部春季大会にてこの作品についての研究報告を行っており、また作品の再現に向けてのプロジェクトも立ち上げられている。「一日二四〇時間」の再上映と、著者による真の「最終章」が書かれる日が待ち遠しい。

(二〇二二年二月二八日 人文書院  
三六一頁 四六〇〇円＋税)

「直接的経験（生きられた経験）」を讀者と共有することで、「読者のうちに物語りの外部を触知する想像力と呼び起こす」。

野家氏は、レイモン・ピカールが「ハイ・ナラティヴィスト」と「ロウ・ナラティヴィスト」と名づけた二派に言及し、自らは後者に近いとしている。前者は「物語りを外部をもたない自己完結した「テキストの織物」と見」、後者は「物語りを直接的経験（生きられた経験）を境界条件としてもつ外部に開かれたネットワークと見る」。「物語りのネットワークは境界線としての外部に絶えず圍繞されているのであり、そこから越境してくる異他的なるものの到来と遭遇を通じて、われわれは物語りを語り直し、更新するダイナミズムへと身を投ずる」（野家氏）。本書では、太宰もまた後者に立っているという見取り図が示されている。

(二〇二二年四月一二日 双文社出版  
二七八頁 四八〇〇円＋税)



北川 扶生子 著

## 『漱石の文法』

廣橋 香文

漱石を「十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての帝国主義の時代、そのイデオロギーとなった社会進化論の枠組」の中で生きた「後進国の知識人作家」と捉え、ジャンルや文体が主題と不可分とする視点から、全期にわたる作品を辿った読み応えある一冊である。

「第一章 書く読者たち」は、明治期二十世紀幕開け前後に展開された〈文〉の多彩な下位ジャンルに着眼、整理している。特に紀行文に焦点を絞って丹念な調査がなされ、示唆と教示に富む。続く「第二章 美文と恋愛」は〈文〉で書かれた初期作品、「第三章 小説と恋愛」は言文一致体を採用した「三四郎」以後の作品を論じる。前者

で興味深いのは、「幻影の盾」「薙露行」「虞美人草」の美文および「草枕」の漢語漢詩が、当時読者の現実との心理的距離を確保して「他界性」を演出し、通念に反した「恋愛」概念の描出を可能にしたとの指摘である。後者では、

開化が進むにつれ、古典的教養や伝統文化に支えられた士大夫意識が新聞小説の読者から失われていく社会状況と「門」「明暗」との関連を明らかにしていて説得力を感じた。一転して「第四章 江戸とロンドンのあいだ」は、英文学者漱石を視野に入れた奥行きのある考察である。ポープやアディソン、ステイルルについて、彼らの作品の古典的修辞や訓戒の明示、風俗描写、ウ

ィットが英日共通の十八世紀文学の特徴であるゆえに共感を抱いた漱石だが、

一方で、内面心理を描く写実小説を目指すべきとする社会進化論的文芸観の影響下、否定評価を下した経緯を追う。

さらに、ヴィクトリア朝芸術の、シェイクスピアに取材し新興資本家層が支えたという帝国主義的側面を指摘して、漱石の「違和感」を推定する。ラファエル前派芸術が彼の留学生生活の慰安となった、という肯定的受容に偏る従来評に対して、鋭い反論となっている。

本書全体を見渡すと、論理展開の鮮やかさと表裏をなし、時に読みが図式的になる印象は否めず、また、作品の虚構性の拠をジャンルや文体に負わせ過ぎではないかという疑問も残る。しかし、漱石の内なる後期江戸文芸が創作に落とした影を、様々な方向から検討した、意義深く刺激的な研究報告である。

(二〇二二年四月三〇日 水声社

二八八頁 四〇〇〇円＋税)

岡田 正子 著

## 『幸田露伴と西洋 キリスト教の影響を視座として』

長濱 拓磨

先頃の芥川賞では七十五歳という最年長の受賞者が生まれ話題となった。本書の筆者岡田正子氏も八十代にして約六百ページに及ぶ研究書を刊行した。両者ともに文学への情熱を永年持続し続けた努力の成果であり、頭が下がる思いである。

さて、本書は幸田露伴をキリスト教の影響から見ると「古くて新しい課題」に取り組んだものである。「古い」というのは、本著執筆の動機としても挙げられているように、笹渕友一が『浪漫主義の誕生』(明治書院、昭和33)で露伴文学を「キリスト教的浪漫主義」と「解釈」したことを示す。その笹渕の「解釈」に対しては、平岡敏夫・三

好行雄らによる「反近代」の文学史観という反論が起こり、本格的な露伴研究が始まったが、その後は幸田露伴におけるキリスト教の影響について顧みられることはほとんどなかった。その意味では「新しい課題」と言える。

一般的に作家とキリスト教の影響関係を見る場合は、太宰治のような多くの聖書引用を作品に行った作家であったり、遠藤周作のようなキリスト教作家が対象となる。幸田露伴の場合は、作品中に聖書引用が多くなされているわけでもなく、キリスト教的思想も直接表われているわけでもないで、その影響関係の検証は困難なものとなる。一步誤ると恣意的な読み方に陥ってし

まう危険性を孕んでいるからだ。しかし、本書ではその危険に果敢に挑み露伴文学の新しい読みの可能性を広げたと見えよう。

とりわけ、露伴とキリスト教との出会いを従来の父の改宗によるものではなく、もっと前の「東京英学校」時代に置くという指摘や、「恋愛観」「愉快観」「風流観」から分析した『露伴々々考』、「珠運」のモデルとして狩野芳崖を取り上げた『風流佛』考、さらに言及されることの少ない少年文学『悪太郎のはなし』『休暇傳』や評論『愛』考にまで検証を行っている点は重要である。

これらによって作品内に充溢する思想の根元に深く切り込みを入れ、そこに潜むキリスト教的思想に光が当てられている。そこには筆者の篤実な人柄や誠実な信仰態度を窺うことができよう。

(二〇二二年一〇月一五日 関西学院大学出版会 六一二頁 六八〇〇円＋税)

## 『犀星文学 いのちの呼応―庭といきもの―』

能地 克宜

室生犀星と云えば、生い立ちをめぐる伝記や抒情詩人、市井鬼もの、王朝物語など、ある既存のテーマに沿った研究が専らなされてきたように思える。しかし、犀星ほど多くの「庭」にまつわる文学作品を書き残した作家はいない。本書が犀星の「庭」について言及し、これまでの半ば固定した犀星文学のイメージに新たな視点を導入したことは、犀星研究において大きな飛躍と云ってよいだろう。

本書の目的は「序説」によれば犀星文学を「いのちの呼応」の文学と捉え、「とりわけ庭、生き物との交感から、その魅力を読み解こうと試みる事」にある。第一篇「庭」では、犀星が「最後に至りついた庭像」、すなわち、「自

然を人間の生活空間に囲い込んで馴化させ「人工」化をはかり、それを保存するという態度」を提示している。しかもそれが昭和九〜一一年にかけて訪れた京都体験に端を発しており、同時に書かれた市井鬼ものといういわば秩序なき世界が、一方で計算された人工美を見いだしていく過程とも「呼応」していく。ここに、そうした世界を描く犀星の方法意識の高さも窺えよう。第二篇「いきもの」は初期から晩年に至る専ら小説作品に登場する犬や猫などの動物について考察している。例えば、「愛猫抄」の特質は夫婦の見る飼猫の幻影によつて「読者の日常感覚からの逸脱を促し、自己存在が拠つてたつ感受性の足場を揺さぶる」「怖さ」に

あるという。読後に「人間（夫婦）関係の根源的な救いのなさ」が残るのも、「実体」のない幻影を書き記すところにあるという指摘は、例えば同時期の短篇小説「十字街」（大正一〇）における「一つの黒い影」が死して実体化していくことと通底していく。第三篇「詩歌と風土」では犀星の詩歌俳句を中心にまとめられている。

犀星文学はある一つの視点で捉えようとすると、どうしてもそこに回収されない残余のようなものが残されるという傾向が他の作家と比べて強いと言える。犀星文学の全体像を掘り起こすには、著者の研究姿勢に倣い、新たな視点を次々と獲得し、複数の視点で捉えていく他はないと思われる。そのような意味でも本書は今後の犀星研究の活性化に一石を投じた書物であることは言うまでもない。

（二〇二二年一月一六日 鼎書房  
二九二頁 二五〇〇円＋税）

## 会議の記録（二〇二二年度）

四月三日（金）

支部長・運営委員長・事務局補佐でミーティング。業務及び組織面の運営方針および年間スケジュールの確認など。（西宮市甲東センター）

四月二日（土）

運営委員会。運営委員顔合わせ、各担当委員の決定、会計報告・予算について、二〇二二年度春季大会のスケジュール確認と当日の分担、関西支部運営に関する当面の課題について（大会特集企画および出版事業の展開、運営委員への交通費補助の見直し）、年間スケジュールの確認、春季大会案内発送作業。（奈良教育大学）

六月九日（土）

運営委員会。春季大会および総会について（スケジュールと分担の確認、総会の議題、議長団の人選、会計報告・

予算案、秋季大会について（小特集登壇者とスケジュール確認）、関西支部運営に関する当面の課題について（大会特集企画および出版事業の展開について、「会報」の拡充について、企画・運営のための検討ワーキンググループの立ち上げ）。

総会。新運営委員紹介、運営委員の任期について、二〇二一年度事業報告、二〇二一年度会計報告、二〇二一年度会計監査報告、二〇二二年度事業計画、二〇二二年度予算案。（大阪樟蔭女子大学）

六月中旬〜七月中旬

中・長期的展望に立った支部事業立案のためのWG（以下「企画WG」）によるメール会議。運営委員から集められた企画案にもとづく支部事業の方針と内容について。

六月中旬〜七月下旬

「会報」見直しのためのWG（以下

「会報WG」）によるメール会議。「会報」の刷新と新たな誌面内容と構成について。

七月一日（土）

企画WGミーティング。検討課題の確認、全国大会の関西支部運営について、出版社との打ち合わせ報告、大会企画と出版事業の展開について、運営委員会組織の問題。（西宮市甲東センター）

八月四日（土）

運営委員会。『京都近代文学事典』の編集状況について、秋季大会について（自由研究発表者の決定、小特集企画について）、二〇二三年度以降の関西支部事業方針について（全国大会の関西支部運営について、支部事業の方針について）、二〇二三年度春季大会について、支部会報について（発行回数の変更、内容の刷新）、会計について。（奈良教育大学）

八月中旬～九月中旬

企画WG、会報WGともにメール会議。

九月一七日(月)

企画WGミーティング。全国大会の関西支部運営問題について(現状とスケジュールの確認、特別検討委員会の設置について、大会会場校について、関西支部運営部分と連続企画の接続について)、二〇一三～二〇一四年度の連続特集および出版企画の内容について(連続特集企画の具体的内容について、二〇一三年度春季大会特集シンポジウムの内容と登壇候補者、二〇一三年度春季大会および以後の運営体制について)、大会企画以外の支部事業の展開について。(西宮市甲東センター)

九月二十九日(土)

秋季大会案内発送作業。(奈良教育大学)

一〇月一四日(日)

運営委員会。秋季大会について(発表題目等の確認、印象記執筆者の人選、役割分担)、二〇一三年度以降の関西支部事業方針について(企画方針、連続企画について)、二〇一三年度春季大会について(特集シンポジウムの方針と企画担当委員の人選など)、二〇一三年度秋季大会の本部・関西支部合同開催について(理事会からの正式依頼への対応、特別検討委員会の設置、臨時総会の開催について(議題および審議の進め方等の確認)、支部会報について(スケジュール確認など))。(奈良教育大学)

一〇月二一日(日)

二〇一三年度春季大会企画ミーティング。趣旨文作成、登壇候補者の人選。(奈良教育大学)

十一月三日(土祝)

運営委員会。秋季大会について(ス

ケジュールおよび分担の確認)、臨時総

会議題および説明内容等について、二〇一三年度春季大会について(日程内容確認、登壇者の人選)、二〇一三年度秋季大会について(日程、特集内容の確認、運営体制について、特別検討委員会について)、会報について(書評執筆者の人選、原稿メ切的確認、リニューアルに向けた予算措置について)、三月運営委員会の日程変更について、新運営委員会の人選について(補充人数と人選の方針確認)。

臨時総会。二〇一三年度秋季全国大会開催に関する理事会からの依頼とその対応について、二〇一三年度関西支部秋季大会の開催方法について、二〇一三年度以降の全国大会運営の一部を担う件への対応について、二〇一三年度～二〇一四年度連続企画について、関西支部『会報』のリニューアルについて。(立命館大学)

二月一六日(日)

特別検討委員会。経過報告と当面の課題、関西支部より本部への要望内容について、会場校について(以上第一部)、学会理事会からの説明と質疑、関西支部より本部への要望について、二〇一三年度秋季大会の運営について、学会本部と各支部の今後のあり方について(以上、第二部)金子運営担当理事出席)。(西宮市甲東センター)

二月二二日(土)

運営委員会。特別検討委員会の報告、二〇一三年度春季大会について(内容確認、司会の人選)、二〇一三年度秋季大会について(企画担当委員の設置)、会報リニューアルについて(編集体制、装帧、出欠ハガキの廃止など)、新運営委員の人選。(奈良教育大学)

一月一三日(日)

二〇一三年度秋季大会企画ミーティング。趣旨文作成、登壇候補者の人選。

(武庫川女子大学)

三月一〇日(日)

運営委員会。二〇一三年度秋季大会の会場および日程について、本部全国大会新企画(若手研究者ワークショップなど)の動向について、二〇一三年度春季大会について(内容確認、企画題目、登壇順の決定)、二〇一三年度秋季大会について(趣旨文作成、登壇候補者の人選、運営体制の確認)、会報の編集作業と確認、運営委員の交通費補助について。(奈良教育大学)

三月二三日(土)

運営委員会。新規運営委員の紹介、二〇一三年度スケジュールの確認、二〇一三年度各担当委員の決定と引き継ぎ、二〇一三年度秋季大会について(企画担当の決定、題目および趣旨文の再検討)、会報編集作業、会計報告・予算について。(奈良教育大学)

二〇一二年度役員

支部長	大橋毅彦
運営委員長	日高佳紀
運営委員	青木亮人 越前谷宏
	小川直美 金岡直子
	木田隆文 黒田大河
	笹尾佳代 高木彬
	竹松良明 仲秀和
	長沼光彦 長原しのぶ
	永淵朋枝 信時哲郎
	宮内淳子 山崎正純
	山本欣司 渡部麻実
	渡邊ルリ

## 日本近代文学会秋季大会 関西支部特集企画 研究発表募集のお知らせ

すでに周知しておりますように、二〇一三年度関西支部秋季大会は、全国大会と合同のかたちで開催いたします。大会二日目午後は、関西支部による研究発表企画をおこなうことになりました。内容は、二〇一三年度関西支部春季大会から始まった連続企画「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」（全四回）の第二回と位置つけた特集といたします。本特集企画への研究発表を募ります。ご希望の方は、次の要領でご応募ください。

タイトル 拡張する〈作家／作者〉イメージと実証性のありか（仮）

日時会場 二〇一三年一〇月二七日（日） 関西大学

募集人数 一〜二名（他に支部依頼の発表を予定）

応募締切 二〇一三年七月二〇日（土）

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

○企画の趣旨等の詳細は関西支部HPに掲載いたします。

○個人発表の発表時間は三〇分程度です。

○採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に關してご不明の点は事務局までおたずねください。

多くの会員の方々の、積極的なご応募を期待します。

送付先 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学日高佳紀研究室内 日本近代文学会関西支部事務局

### 事務局便り

#### ○関西支部会報のリニューアルについて

本号より支部会報を全面的に刷新し、年二回発行、大会プログラム・発表要旨・大会印象記の併載、書評記事といった内容で再スタートすることにいたしました。従来の会報刊行の意義と姿勢をふまえつつ、今日の研究環境に見合った編集を心がけてまいります。

#### ○献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象に、書評欄を設置いたしました。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

#### ○維持会費納入のお願ひ

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

#### ○関西支部二〇一三年度運営委員（※〇：新規委員）

○天野知幸 越前谷宏 ○岡村知子 小川直美 金岡直子 木田隆文 ○須田千里 ○関肇 高木彬 ○高橋幸平

長沼光彦 長原しのぶ 永瀨朋枝 ○西山康一 信時哲郎 日高佳紀（委員長） 山崎正純 ○山田哲久 山本欣司

渡部麻実 渡邊ルリ ○和田崇

○日本近代文学会関西支部事務局 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学日高佳紀研究室内